

# 久邇京の歌

小 野 寛

## 一

十二年庚辰冬十月、大宰少貳藤原朝臣広嗣謀反して軍を發せるに依りて、伊勢國に幸しし時に、河口の行宮にして内舍人大伴宿祢家持の作る歌一首

河口の野辺に廬りて夜の経れば妹が手本し思ほゆるかも(61029)

天皇の御製歌一首

妹に恋ひ吾の松原見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る(61030)

右の一首、今案ふるに、吾の松原は三重郡にあり、河口の行宮を相去ること遠し。けだし朝明の行宮に御在す時に製らす御歌なるを、伝ふる者誤れるか。

丹比屋主真人の歌一首

後れにし人を偲はく四泥の埒木綿取り垂でてさきくと思ふ(61031)

右を案ふるに、この歌はこの行の作にあらじか。然言ふ所以は、大夫に勅して河口の行宮より京に還し、從駕せしめしことなし。何そ思泥の埒を詠めて歌を作ることあらむ。

狭残の行宮にして、大伴宿祢家持の作る歌二首

大君の行幸のまにま吾妹子が手枕まかず月を経にける(61032)

御食つ国志摩の海人ならしま熊野の小船に乗りて沖辺漕ぐ見ゆ(61033)

美濃国の多芸の行宮にして、大伴宿祢東人の作る歌一首

古ゆ人の言ひける老人の妻若つといふ水そ名に負ふ滝の瀬（6一〇三四）

大伴宿祢家持の作る歌一首

田跡川の滝を清みか古ゆ宮仕へけむ多芸の野の上に（6一〇三五）

不破の行宮にして、大伴宿祢家持の作る歌一首

閑無くは帰りにだにもうち行きて妹が手枕まきて寝ましを（6一〇三六）

聖武天皇が平城宮を捨てて山背国相楽郡の恭仁の宮に遷都するに至った、天平十二年（七四〇）の藤原広嗣の乱における伊勢行幸の中で歌われた歌が、右のように万葉集巻六に収められている。広嗣の乱について続日本紀はまず、天平十二年八月二十九日の条に、

大宰少貳従五位下藤原朝臣広嗣表を上って、時政の得失を指し、天地の災異を陳べ、因りて僧正玄昉法師・右衛士督従五位上下道朝臣真備を除かんといふを以て言を為す。

とある。広嗣は時の政治のあやまちを指摘し、天平九年の悪疫など天地の災異はそれによることをのべ、その根本原因たる、聖武の側近として重用されている僧玄昉と下道真備を除くべしと言ったのである。その上表文が八月二十九日に朝廷に届いたのであった。

同九月三日に、

広嗣遂に兵を起こして反す。勅して、従四位上大野朝臣東人を以て大將軍と爲し、従五位上紀朝臣飯麻呂を副將軍と爲す。軍監軍曹各四人。東海・東山・山陰・山陽・南海五道の軍一万七千人を徵發し、東人に委ね、節を持して之を討たしむ。

とある。上表文到着からわずか四日の後に、広嗣が九州において反乱の兵をおこしたという報告が朝廷にはいったのである。上表文に対する朝廷の反応も見ずになされた広嗣の挙兵は、その要請を武威をもって押し通そうとしたのであろうか。聖武天皇は直ちに参議大和守大野東人を大將軍に任じて節刀を与え、副將軍・軍監・軍曹までととのえ、

東海・東山・山陰・山陽・南海五道の軍団の兵に動員令を下し、広嗣討伐に向かわせたのである。

兵士徴集とそれに伴う軍編成に手間取りながらも、官軍は反乱軍を追いつめていった。そのさ中のことである。  
十月十九日に、

伊勢国の行宮を造る司を任ず。

十月二十三日に、

次第司を任ず。従四位上塩焼王を以て御前長官と為す。従四位下石川王を御後長官と為す。正五位下藤原朝臣仲麻呂を前騎兵大將軍と為す。正五位下紀朝臣麻路を後騎兵大將軍と為す。騎兵・東西史部・秦忌寸等惣て四百人を徴發せしむ。

十月二十六日に、

大將軍大野朝臣東人等に勅して曰はく、「朕意へる所有るに縁りて、今月の末、暫く関東に往かむ。其の時に非ずと雖も、事已むことを能はず。將軍之を知るとも驚懼すべからず。」と。

十月二十九日に、

伊勢国に行幸す。

とある。聖武は十月十九日に伊勢行幸のための造伊勢国行宮司を任命し、二十三日には行幸に関する人事を發令し、二十六日、征西の大將軍大野東人らに、思うところあつて暫く関東に行くことを伝え、この非常時に天皇が都を離れることは適當ではないが聖武としてはどうしてもやむをえないことであると述べ、驚かないようにとまで述べている。そして二十九日、いよいよ伊勢へ向けて出發した。四百人の騎兵に前後を護衛させたのは、やはり戦時体制である。留守官は、知太政官事鈴鹿王と兵部卿兼中衛大將藤原豊成であつた。

十月二十九日。是の日、山辺郡竹谿村堀越の頓宮に到る。

同三十日。車駕、伊賀国名張郡に到る。

十一月一日。伊賀郡安保の頓宮に到りて宿る。大いに雨ふり、途泥にして人馬疲煩す。

同二日。伊賀国志志郡河口の頓宮に到る。之を関宮と謂ふ。

平城宮を發つた日は大和の山辺郡竹谿村の堀越の行宮に泊った。翌三十日は伊賀国の名張郡の郡衙に泊ったのである。十一月一日は大雨で泥道に人馬いたく疲れ、伊賀郡の安保の行宮に泊り、翌二日に伊勢国志保郡河口の行宮、関宮に着いた。ここには十日間滞在することになる。

十一月三日に、

是の日、大將軍東人等言す。「進士无位安倍朝臣黒鷹、今月廿三日丙子を以て、逆賊広嗣を肥前国松浦郡値嘉嶋長野村に捕へ獲つ。」と。詔り報へて曰はく、「今十月廿九日の奏を覽て、逆賊広嗣を捕へ得たることを知りぬ。其の罪顕露にして、疑ふべきにあらず。宜しく法に依りて処決し、然る後に奏聞せよ。」と。

十一月五日に、

大將軍東人等言す。今月一日を以て、肥前国松浦郡に、広嗣・綱手を斬ること已に訖んぬ。

続紀の右の記載によれば、十月二十三日に逆賊広嗣は肥前国松浦郡五島列島の値嘉嶋で捕えられ、その報告を大將軍東人が受けたのが六日後の二十九日で、東人はその日直ちに朝廷へ広嗣逮捕の報せを發したのである。文中の「十月廿九日の奏」とはそれを指す。そしてその「奏」が十一月三日に河口の関宮に届いたのである。聖武はその日に、広嗣らの罪状は明らかであるから法によって直ちに処刑し、その後報告奏上せよと勅した。ところが処刑はすでに十一月一日に行われていて、広嗣と弟綱手は斬殺された。大野東人のその報告は十一月五日に、同じく河口の関宮に着いたのである。ここに、広嗣の乱は終った。

聖武はここ河口の関宮に、あと六日間滞在することになる。平城京の留守官に鈴鹿王が任ぜられていたから、旅先の聖武の側には右大臣橘諸兄がいた。また、前衛の騎兵大將軍として藤原仲麻呂が近侍していた。その兄豊成は留守官であった。大伴家持は内舍人として供奉していたのである。万葉集卷六の歌は、この時、ここで作ったという。

家持は、河口の野辺に旅宿りの幾夜をも経て妻の手枕が恋しいと歌う。この異常な政治情勢のさ中であって、何不謹慎なと思われるのだが、政治と文雅の世界とは常に別であるということなのか、この反乱に対する家持の感慨は聞くことができない。

大乱が平定され、聖武はもとより従駕の人々も胸をなでおろした河口の行宮での後半の日々に、家持は妻の手枕を

思う余裕も出て来たのであろう。しかしこの聖武のあと六日間、河口滞在は何の故であつたろうか。続紀は五日以後十二日の河口出立まで何も記さない。北山茂夫氏は、遷都の問題について諸兄ら台閣の重臣たちが協議をこらしていたのではないか、そうでなければ、ここからすぐに平城にひきかえしてよいはずである、と言っている。恐らくその推測は正しい。内乱が収まり、その戦後処理の政務が待っているこの時に、都へ帰る道をとらずに都から離れて旅を続けるという異常な決定をみるには、かなりの論議があつたことであらう。河口滞在は当然その協議の期間だつたと思われる。

続紀はこの後の過程を次のように記している。

十一月十二日に、

車駕、河口より発して、菟志郡に到りて宿る。

同十四日に、

進みて、鈴鹿郡赤坂の頓宮に至る。

同二十三日に、

赤坂より発して、朝明郡に到る。

聖武は河口の関宮を出て東に向かい、途中菟志郡の郡衙に一泊して、十四日に鈴鹿郡赤坂の行宮にはいった。続紀は再びここで六日間全く記事を欠き、二十一日に、このたびの内乱平定および伊勢行幸に関する論功行章が行われたことを記す。

六日間無為に日を送っていたはずはない。遷都の問題は河口で決していなかったのではないか。ここ赤坂の行宮でついに決したのだ。もう平城京へは戻らない。そこで二十一日の叙位のことがあつたのだと見よう。翌二十二日、五位以上に各位に應じて賜わり物があり、そして二十三日、赤坂の行宮を發した。その日、伊勢国朝明郡の郡衙に泊った。

「吾の松原」を詠った聖武の歌は、左注には「朝明郡の行宮」で作られたのであらうと推定している。聖武はこの朝明郡に一日休養している。その余裕の中で歌つたのであらうか。

狹残の行宮で作った家持の二首は、第一首は河口の行宮での作と全く同趣のもので、いわゆる旅の歌の典型をなぞったもののだろう。家持が旅中でひたすら思っていることはこのことなのだというようには思えない。

狹残の行宮は続紀の記載の中には見えない。第二首によれば、志摩の海人がま熊野の小船に乗って沖を漕ぎ行く情景であり、まさに伊勢の海である。

続紀によれば、河口の関宮を十二日に発ち、その日は志志郡、十四日に鈴鹿郡赤坂の行宮、二十三日に朝明郡、二十五日に桑名郡石占の行宮、二十六日には美濃国当伎郡である。

当伎郡（延喜式には「多芸」）は明治になって、上石津郡と合して養老郡となった。東人の歌う「老人の変若水」こそ養老の滝の水であり、家持の「田跡川」は現在の養老川、養老の滝は多度山中にある。その滝を「田跡川の滝」と歌っている。三日間ここに遊んで、一行は不破に向かう。

続紀、十二月一日の条に、

不破郡不破頓宮に到る。

同四日の条に、

騎兵の司を解きて、京に還り入らしむ。

とある。不破において聖武は護衛の騎兵の任務を解いて京へ帰還させたのである。家持がここで「関無くは帰りにだにもうち行きて妹が手枕まきて寝ましを」と歌ったのは、「不破の関」とこの騎兵隊の帰還があったのである。万葉集巻六に歌は不破で終るが、聖武の行幸は続く。

同六日。不破より発して、坂田郡横川の頓宮に至る。是の日、右大臣橘宿祢諸兄、前に在りて発して、山背国相楽郡恭仁郷を径略す。遷都を擬するを以ての故なり。

同七日。横川より発して、犬上の頓宮に到る。

同九日。犬山より発して、蒲生郡に到りて宿る。

同十日。蒲生郡の宿より発して、野洲の頓宮に到る。

同十一日。野洲より発して、志賀郡末津の頓宮に到る。

同十四日。禾津より発して、山背国相楽郡玉井の頓宮に到る。

不破の関を越えて近江国坂田郡の横川の行宮に着いた日、右大臣橘諸兄は一行から離れて山背国相楽郡恭仁郷に向  
け先発した。そこに都を遷すことが決まっていたのである。新都造宮の下準備をしておくための先行であった。

聖武は、坂田郡横川から犬上、蒲生、野洲を経て志賀郡の粟津頓宮に至り、ここで天智天皇ゆかりの崇福寺に仏を  
拝するなどして数日をすごし、十二月十四日、山背国相楽郡の玉井頓宮に着いた。相楽別業と呼ばれる右大臣橘諸兄  
の別荘である。この夏五月に聖武はここに招かれて二日ほどすごしたことがあった。ここから恭仁郷は東南方わずか  
五キロばかりであるが、聖武はまずここに一泊した。先発した右大臣諸兄は恐らくこの別荘にあって新都建設準備の  
指揮をとっていただろう。

そして十二月十五日に、

皇帝前に在りて、恭仁宮に幸す。始めて京都を作る。太上天皇・皇后は後に在りて至る。

とある。聖武がはいった「恭仁宮」とは、やがて皇都となる恭仁の京域を指しているのであろう。ここには古くから  
甕原離宮があった。聖武を迎えて、正式に恭仁の新都建設がスタートしたのである。この都を万葉集ではもっぱら  
「久邇京くのみやこ」と記している。小稿ではこの表記を用いることにしたい。

## 二

大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首

み冬継ぎ春は来れど梅の花君にしあらねば招く人もなし（17三九〇一）

梅の花み山としみにありともやかくのみ君は見れど飽かにせむ（17三九〇二）

春雨に萌えし柳か梅の花共に後れぬ常の物かも（17三九〇三）

梅の花いつは折らじと厭いとはねど咲きの盛りは惜しきものなり（17三九〇四）

遊ぶ内の楽しき庭に梅柳折りかざしてば思ひなみかも（17三九〇五）

み園生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降りけむ（17三九〇六）

右、十二年十二月九日に大伴宿祢書持作る。

右の左注は、諸本には「十二年十一月九日、大伴宿祢家持作」とあるが、元暦校本に右のようにあって、それによっている。十一月九日は家持は河口の行宮に居り、十二月九日は犬上頓宮を發つて蒲生郡へ旅をした日である。河口の行宮での家持の歌ならば、どうして卷六の一〇二九の記録と別になったのだろうか。十二月九日であったならば、家持にはこれだけの作歌の余裕はなかったと思われる。卷十七所載のこの六首は、卷十七の巻頭部分のいわゆる拾遺部に収められていて、卷十六以前の巻々に収めた家持関係歌の記録と無関係の資料にあったらしい。それを私は、卷十七のこのあととの記録も含めて書持資料というべきものではなかったかと思う。この六首は元暦校本に記し残された通り、「天平十二年十二月九日、大伴宿祢書持作」である。

卷十七には続いて次の歌々が収載されている。

三香の原の新都を讃むる歌一首短歌を并せたり

山背の 久邇の都は 春されば 花咲きををり 秋されば 黄葉にほひ 帯ばせる 泉の川の 上つ瀬に 打橋  
渡し 淀瀬には 浮橋渡し あり通ひ 仕へまつらむ 万代までに (17三九〇七)

反歌

橘並めて泉の川の水脈絶えず仕へまつらむ大宮所 (17三九〇八)

右、天平十三年二月、右馬頭境部宿祢老麻呂作る。

霍公鳥を詠む歌二首

橘は常花にものがほととぎす住むと来鳴かば聞かぬ日なけむ (17三九〇九)  
玉に貫く棟を家に植ゑたらば山ほととぎす離れず来むかも (17三九一〇)

右、四月二日、大伴宿祢書持、奈良の宅より兄家持に贈る。

橙橘初めて咲き、霍公鳥翻り嚶く。この時候に對ひて、詎そ志を暢べざらむ。因りて三首の短歌を作り、  
鬱結の緒を散らさまくのみ。

あしひきの山辺に居ればほととぎす木の間立ちくき鳴かぬ日はなし (17三九一一)



ほととぎす何の心を橘の玉貫く月し来鳴きとよむる(17三九二)  
ほととぎす棟の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見るまで(17三九三)

右、四月三日に、内舍人大伴宿祢家持、久邇京より弟書持に報へ送る。

以上、書持の記録ではないだろうか。家持の弟書持の資料が卷十六までの編纂にどうして漏れたか。その編纂の中心人物が家持だとすれば、その脱漏の理由がわからない。同じく、十年七月七日の家持自身の歌が一首、この卷十七に拾い出されていることも合わせて考えてみるなくてはならないことである。

境部老麻呂は伝未詳であるが、恐らくは家持や書持の近くにいた人物であろう。天平十三年二月の久邇京讃歌は記録上最初の作品である。

久邇京は天平十三年正月元旦にスタートした。続紀に、その日、

天皇、始めて恭仁宮に御して朝を受く。宮垣未だ就らず。繞すに帷帳を以てす。是の日、五位已上を内裏に宴す。祿を賜ふこと差有り。

とある。「御」は「御<sub>二</sub>大極殿<sub>一</sub>」「御<sub>二</sub>大安殿<sub>一</sub>」「御<sub>二</sub>中宮<sub>一</sub>」「御<sub>二</sub>松林苑<sub>一</sub>」と用いられる。「恭仁宮に御す」という「恭仁宮」は何を指しているのだろうか。朝賀を受ける場所は大極殿である。恭仁宮は旧臘十五日に建設を始めたばかりであったから、半月では何ほども形をなしていなかったであろう。そんな建設途上の「宮」へ出御されたのである。まわりに帷帳をめぐらした中で拝賀の式が行われた。この日「内裏」で肆宴があったとあるが、内裏もまだ出来ていなかったはずで、肆宴はあったろうが、これも仮宮殿で行われたことだろう。

天平十三年正月十一日の条に、

使を伊勢大神宮及び七道の諸社に遣して、幣を奉り、以て新京に遷る状を告げしむ。

とある。遷都はここに正式に行われたのであった。しかしその新しい都は建設が始まったばかりであった。

久邇京は、今の京都府相楽郡加茂町である。

平城京から奈良山を北に越えたと木津である。笠置方面から西流して来た木津川がここで直角に北へ曲がり、ここから北流する。この川が泉川である。木津の町の東に鹿背山がある。標高二〇四メートルである。泉川は鹿背山の北

をめぐって流れ、関西本線は鹿背山の南へまわり込み、この丘陵をトンネルでくぐる。木津駅からこのトンネルをくぐって七、八分で、加茂駅である。鉄道は遠慮がちに山裾近くを通っているので、加茂駅からは北へ、四周を山に囲まれながら開けている。これが久邇京の地である。その盆地の中央を東から西へ泉川がゆったりと流れている。境部老麻呂が「帯ばせる泉の川」と歌った。大和には見られない幅広い、水量豊かな大河である。加茂駅から北へ約一キロ、泉川にかかる恭仁大橋を渡る。橋を過ぎて北へ四〇〇メートル行き、西へ折れてさらに六〇〇メートルほど行くと恭仁小学校がある。その小学校の北に雑草の茂るにまかせた土壇があり、礎石が数基ちらばっている。その土壇の中央に「山城国分寺趾旧恭仁宮趾」と刻んだ石柱が立っている。ここが山城国分寺の金堂跡で、国の史跡に指定されている。

続紀、天平十八年九月二十九日の条に、

恭仁宮の大極殿を国分寺に施入す。

とあるのによれば、この山城国分寺金堂跡こそ久邇京大極殿の跡であろう。しかし、ここに残された礎石はほんの数基で、その規模や構造を知ることとはできそうもない。

そこから東に小道を隔てて古びた社があり、その先の荒れた田んぼの中にまた土壇がある。ここは国分寺の七重塔の跡という。狭い土壇の上に大きな立派な礎石が並んでいる。一きわ大きい塔心礎も周囲の礎石も上面が円形に刻まれ、中心に丸いこぶまで彫り出されている。建物の角に当る礎石にはさらにそれとわかる細工が施してある。ここに「恭仁宮大極殿趾」と刻んだ大きな石柱が立てられている。先述した通りであれば、この碑は金堂跡に立てられるべきものである。

山城国分寺金堂跡はこの盆地のまさに中央、北辺に当たり、その真北一直線上に標高四七三メートルの三上山が来るといふ位置になる。盆地の真北にそびえる三上山から引いた線を、いわば朱雀大路として、これを都造りの基線としたのではないだろうか。今、この金堂跡のあたりから北一帯の字名を登大路という。ここに久邇京大極殿があり、内裏があったことは動かしがたいと思われる。

しかしながら考古学的には、これを裏付ける資料はまだ確認されていないという。国分寺跡であることは疑いない

が、それが久邇京とまったく重なるのかどうか。ここで出土した軒瓦類の中に平城宮跡から出土する瓦に類似したものが含まれているという。続紀、天平十五年十二月二十六日の記事の後に、

初め平城の大極殿並びに歩廊を壊ちて、恭仁宮に遷し造ること四年にして、

とあって、平城宮の大極殿と歩廊を解体して久邇京に移築したことがわかる。この両者を関連づけて、わずかに、山城国分寺金堂跡を久邇京大極殿とする考古学的根拠になっているらしい。久邇京の位置は厳密に言えばまだ不確かなのである。

続紀、天平十三年閏三月九日の条に、

使を遣して平城宮の兵器を遷原宮に運ばしむ。

とある。平城宮から移した兵器はひとまず、聖武の仮宮殿であった遷原離宮に運び込んだのであろう。「遷原宮」と記したのは遷原離宮を指していると思われる。

聖武はまことに性急であった。

同十五日の条に、

留守従三位大養徳国守大野朝臣東人、兵部卿正四位下藤原朝臣豊成等に詔して曰はく「今より以後、五位以上は意のままに平城に住むことを得ざれ。もし事故有りて応に退き帰らむには、官符を被ふり賜ひて、然して後に之を聴せ。其の平城に現在する者は今日の内を限りて、悉くに皆催し発せよ。自余の他所に散在する者も亦宜しく急に追すべし。

とある。五位以上の官人達への厳しい勅命である。「わけがあつて平城の旧宅に帰る者でも所轄官庁の許可証がなければ入京を許してはならない。現在平城に残っている者は今日中に皆出発するように督促せよ。平城京外に住んでいる者も急ぎ出立させよ。」という、平城京留守官大野東人・藤原豊成への勅命であった。

家持は内舍人として伊勢行幸以来聖武に供奉し、聖武に近侍してそのまま久邇の新京に居た。弟書持はまだ無位無官であったから、このたびの御触があつても平城京にとどまっていることができた。

閏三月十一日の御触によって平城京には五位以上の官人の姿は見られなくなった。平城は急に寂しくなった。四月

二日、平城の宅で書持は、ほととぎすを詠んで兄家持に贈ったのである。ただの「ほととぎす詠」ではないだろう。それは、翌日直ちに報えた家持の歌からも想像されよう。折り返し報えたということ、ほととぎすの歌を作ることによって鬱結の心を散らそうとしたということは尋常ではない。その鬱結の心は何だったのだろう。

伊勢行幸從駕中の家持の歌五首中に見られる吾妹子の手枕を偲ぶ思いがいささかでも真実ならば、旅が終ってから、妻坂上大嬢とは恭仁と平城とに別れたままであることは、若い家持の心を憂鬱にとぎさずにはおかなかった。

天平十一年六月、家持が妾を亡くした時、その亡妾悲傷歌に書持は兄の心になって和している。この度の兄家持に贈る「ほととぎす詠」も、ただの「ほととぎす詠」ではありえない。書持の二首に歌われた心は一つ、ほととぎすがわが家に住みついて絶え間なくその鳴き声を聞かせてほしいという願いである。書持の歌はほととぎすに兄をなぞらえたというような露骨なものではなく、兄への思いをこめて「ほととぎす」を歌っているのである。

家持の三首は書持の歌に応じて作られた。後年、家持は異常なほどほととぎすに執するが、この「ほととぎす詠」三首は家持にとってその初作である。それは明らかに書持によって種を蒔かれたのである。しかし、心情を説明した詞書（書簡というべきだろうか）を添えて即日応じたことは、ほととぎすへの思いは家持にとつてもにわかのことではなかったと思われる。その三首の第一首に「ほととぎす木の間立ちくき鳴かぬ日はなし」（三九一一）という、ほととぎすの動きを適確にとらえ、借物でない独自の表現で歌っている。

「ほととぎす詠」三首は家持の久邇京における最初の歌詠だったと思われる。

### 三

天平十三年の夏が過ぎた。

続紀、秋七月十日の条に、

太上天皇、新宮に移御す。天皇、河の頭に迎へ奉る。

とある。元正上皇を平城から新しい宮に迎えるほどに、新宮は形を成して来たのだろう。

八月二十八日に、

平城の二市を恭仁京に遷す。

とある。平城京にあった東市・西市を久邇京に移したのである。都の庶民の生活もいよいよ新京で始まるのだろう。

九月十二日に、

木工頭正四位下智努王、民部卿從四位下藤原朝臣仲麻呂、散位外從五位下高丘連河内、主税頭外從五位下文忌寸黑麻呂の四人を遣して京都の百姓に宅地を班し給はしむ。賀世山の西道より以東を左京と爲し、以西を右京と爲す。

とある。新京に住もうという一般庶民に宅地を分配したのである。新京の区画整理もでき上がったのだろう。その新京の区割りは鹿背山の西の道より東を左京とし、以西を右京とした。この続紀の記載は、京城として鹿背山の西の今の木津町、山城町をも取り込んだことを示している。新京の構想はまことに壮大であった。いや、巧妙というべきか。

鹿背山の西とは、鹿背山の北麓をめぐって西流して来た木津川が大きく北へ曲るところの流域一帯で、そのカーブの内側が山城町、カーブの外が木津町に当る。この右京に宅地が用意されたのだろうか。平城京の民の大部分が移るならば、この右京を考えない限り十分な宅地の分配は不可能である。

九月三十日に、

宇治及び山科に行幸す。五位已上は皆悉く駕に従ふ。

十月二日に、

車駕、京に還る。

とある。家持は内舍人としてこの行幸にも從駕しただろう。

十一月二十一日に、

右大臣橘宿祢諸兄奏す。「此間の朝廷を何の名号を以てか万代に伝へむ。」と。天皇勅して曰はく、「号して大養德恭仁大宮とせむ。」と。

新しい宮の正式の名を、聖武は「大養德恭仁大宮」と定めた。久邇新京の完成のま近いことを知る記事でもある。

しかし、建設を始めて一年に満たない。宮殿の中で最も大切な大極殿はまだできていなかった。

天平十四年正月一日の条に、

百官朝賀す。大極殿未だ成らず。権に四阿の殿を造りて、此に於て朝を受く。

とある。遷都二年目の元日を迎えたが、大極殿はまだ完成せず、仮造りの建物で聖武は朝賀を受けた。

同正月十六日の条に、

天皇、大安殿に御して、群臣を宴す。酒酣なるときに五節田舞を奏す。

とある。大安殿とは大極殿の意であろう。元日に間に合わなかったものが今完成したかの如くであるが、この「大安殿」は大極殿ではないらしい。二月三日に大宰府から新羅の使者一八七人が来朝したことを伝えて来たが、新京の宮殿がまだ完成していないので大宰府で接待して帰らせるよう、五日に勅している。外国使節を謁見する大極殿はまだ完成していなかったと思われる。

この二月五日に、

是の日、始めて恭仁京の東北の道を開きて、近江国甲賀郡に通す。

とある。久邇京から東北へ和束川に沿って近江国甲賀郡に至る道路の建設を始めたのである。

八月十一日に、

詔して曰はく、「朕將に近江国甲賀郡紫香楽村に行幸せむ。」と。

とある。甲賀郡への道路建設は、甲賀郡紫香楽へ行幸のためのものであった。この日、紫香楽に離宮を造る造宮司を任命している。

八月二十七日に、

紫香楽宮に行幸す。……即日、車駕紫香楽宮に至る。

九月四日に、

車駕、恭仁京に還る。

とある。これから屢々行われる聖武の紫香楽宮行幸の第一回の記録である。

紫香樂宮は久邇京から東北へ約三〇キロ、滋賀県甲賀郡信楽町黄瀬にその遺跡がある。国鉄信楽線が貴生川駅を出るとやがて兩岸の迫る美しい谿流に沿って西へ走る。信楽線は貴生川・信楽間一四・八キロ、もちろんディーゼル・カーである。貴生川から二〇分で溪谷を抜け南へカーブして雲井駅である。ここは南を頂点として逆正三角形の盆地になっている。正三角形の一边約一・五キロの小盆地である。南の頂点に集落があり雲井駅がある。この逆正三角形のまさに中点の位置に紫香樂宮跡がある。そしてここから言えば南西の方角に、久邇京からの道路が通っている。私は雲井駅を通過して次の勅旨駅で下車し、そこから東北への道を歩いて紫香樂宮跡をたずねてみた。聖武のはいったように。そこは大戸川の作る溪谷だが、その流域は広くゆったりして川をはさんで田畑が続き、道路に沿って集落が点在する。雲井に近づくにつれてほんの少しずつ左右の山が遠のいて、いささかなる盆地になる。ここが終点である。久邇京からの道の行きどまりだ。紫香樂宮は山に包まれていた。一辺わずか一・五キロの正三角形の盆地は、まるで両手の掌に包まれた感じだ。聖武が求めたものはこれだったのだろう。聖武の神経に平城京はあまりにも広々として落ちつかなかった。久邇京を求めてみたが、これでさえ聖武には広すぎたのではないか。そんな聖武にここはぴったりと、私は思った。この盆地の入口に立って初めて聖武の求めていたものがわかったような気がした。

紫香樂宮跡と言われる礎石群はその盆地の中央の高みにあるが、それらは完璧な伽藍配置の形を示している。中門跡・金堂跡・講堂跡・僧房跡・小子房跡の礎石がはっきりと残され、鐘樓跡・経蔵跡・塔跡も見られる。廻廊跡もたどられる。

続紀、天平十五年十月十九日の条に、

皇帝、紫香樂宮に御す。盧舍那仏の像を造り奉らむがために、始めて寺地を開く。  
とある。紫香樂宮に近接した地に、盧舍那仏像を安置する「寺」が開かれたのである。

天平十六年十一月十三日の条に、

甲賀寺に始めて盧舍那仏像の体骨柱を建つ。天皇親臨して、手つから其の繩を引く。

とある。これが「甲賀寺」であった。また、紫香樂宮は天平十五年には都としての造宮が始められている。また、ここにはのちに、「甲賀宮国分寺」と呼ばれる寺があった。天平勝宝三年十二月十八日の『奴婢見來帳』にはこの名が

あるという。

紫香樂宮跡とよばれるこの伽藍遺跡は、紫香樂宮を改めて国分寺としたその跡であろうか。それにしてはこの遺跡は、宮殿らしい建物の跡が全くない。あるいは、甲賀寺が国分寺にあてられたその跡であろうか。もしそうだったならば、紫香樂宮の遺跡は別の所に求めなければならない。しかし、もしそうであったとしても、この逆正三角形の盆地の中心のあたりに紫香樂宮のあったことは間違いない。

その年（天平十四年）十二月二十九日に、

紫香樂宮に行幸す。

十五年正月一日に、

右大臣橘宿祢諸兄を遣して、在前に恭仁京に還らしむ。

同二日に、

車駕、紫香樂より至れり。

同三日に、

天皇、大極殿に御して、百官朝賀す。

とある。天平十四年の十二月は、統紀記載の十五年正月一日の干支が辛丑であるのによれば小の月となる。紫香樂宮に行幸した十二月二十九日は大晦日であった。行幸に際して久邇京の留守官が任命されていて、統紀に、知太政官事鈴鹿王・左大弁巨勢奈麻呂・右大弁紀飯麻呂・民部卿藤原仲麻呂の四人とある。右大臣橘諸兄は従駕し、翌日の元旦には聖武の命で先に久邇京に帰ったのである。聖武は二日に久邇京に帰還し、翌三日に大極殿で朝賀を受けた。久邇京の大極殿での朝賀は始めてである。

十五年四月三日に、

紫香樂に行幸す。

同十六日に、

車駕、宮に還る。



とある。第三回の紫香樂行幸であるが、この時の久邇京の留守官は、右大臣橘諸兄・巨勢奈呂麻呂・紀飯麻呂とある。諸兄が残って、鈴鹿王と藤原仲麻呂がお供した。

同年七月二十六日に、

紫香樂宮に行幸す。左大臣橘宿祢諸兄、知太政官事鈴鹿王、中納言巨勢奈呂麻呂を以て留守と爲す。

とある。第四回の行幸である。これまでの紫香樂滞在は、第一回は七日、第二回は年を越して三日、第三回は十四日、そして第四回は一月たっても二月たっても帰ろうとしない。十月十五日には紫香樂宮で盧舍那大仏の造営を發願した。

同十月十六日には、

東海・東山・北陸三道廿五国の今年の調庸等の物は皆、紫香樂宮に貢せしむ。

とあり、

十一月二日に、

天皇、恭仁宮に還る。車駕、紫香樂にに留まり連ること、凡そ四月なり。

とある。第四回目の紫香樂行幸の滞在日数は、実に九十五日であった。その間の留守は知太政官事鈴鹿王・右大臣橘諸兄中納言・巨勢奈呂麻呂が任じられている。藤原仲麻呂は今度もお供をした。

天平十三年からの久邇京での歌は、第二章に大伴書持の資料からかと論じた卷十七所載の歌群を第一群として、全部で四群にまとめることができる。

第二群は、家持を中心とする相聞歌群である。

卷四 七六五～七九〇

卷八 春相聞一四六四

秋相聞一六三一、一六三二

これらはすべて作歌年月未詳である。久邇京のあった天平十三年春から恐らく十五年秋までの作である。第二群の作者およびその相聞の對手は次の通りである。

大伴家持

贈坂上大嬢歌

一〇首

贈紀女郎歌

七首

贈娘子歌

三首

贈安倍女郎歌

一首

贈藤原久須麻呂歌

五首

紀女郎

贈大伴家持歌

一首

贈友歌

一首

藤原女郎

和大伴家持歌

一首

藤原久須麻呂

報大伴家持歌

二首

第三群は、卷六の卷末に追補の形でまとめられている田辺福麻呂歌集の歌および作者未詳歌である。

作者未詳

傷惜寧樂京荒墟作歌

三首

田辺福麻呂歌集

悲寧樂故郷作歌

長歌一首・反歌二首

讚久邇新京歌

長歌二首・反歌七首

久邇京時代に年次の明らかな公的な歌の記録はまったくなく、前述の紫香樂宮への行幸などにも歌詠はなかったらしい。わずかに田辺福麻呂の久邇京讚歌が二首、それもいつ作ったのかその時もその場も明らかでないままに、残されているばかりである。

久邇の新しき京を讃むる歌二首 短歌を并せたり

現つ神 わが大君の 天の下 八嶋の中に 国はしも 多くあれども 里はしも さはにあれども 山並の 宜しき国と 川なみの 立ち合ふ郷と 山背の 鹿背山の際に 宮柱 太敷き奉り 高知らす 布当ふたぎの宮は 河近み 瀬の音ぞ清き 山近み 鳥が音とよむ 秋されば 山もどろに さ男鹿は 妻呼びとよめ 春されば 岡辺も繁に 巖には 花咲きををり あなおもしろ 布当ふたぎの原 いと貴と 大宮所 うべしこそ わが大君は 君ながら 聞かしたまひて さす竹の 大宮こと 定めけらしも (六一〇五〇)

反歌二首

三日の原布当の野辺を清みこそ大宮所 (一に云ふ、こと標さし) 定めけらしも (六一〇五一)  
山高く川の瀬清し百代まで神しみ行かむ大宮所 (六一〇五二)

わが大君 神の命の 高知らす 布当の宮は 百樹もり 山は木高し 落ちたぎつ 瀬の音も清し 鶯の 来鳴く春へは 巖には 山下光り 錦なす 花咲きををり さ男鹿の 妻呼ぶ秋は 天霧らふ しぐれをいたみ さ丹つらふ 黄葉散りつつ 八千年とよに 生れつかしあつつ 天の下 知らしめさむと 百代にも 変るましじき 大宮所 (六一〇五三)

反歌五首

泉川行く瀬の水の絶えばこそ大宮所うつろひ行かめ (六一〇五四)  
布当山山並見れば百代にも変るましじき大宮所 (六一〇五五)  
娘子むすめらが続麻つづまかくといふ鹿背の山時の行ければ都となりぬ (六一〇五六)  
鹿背の山木立を繁み朝去らず来鳴きとよます鶯の声 (六一〇五七)  
狛山に鳴くほととぎす泉川渡りを遠みここに通はず (一に云ふ、渡り遠みか通はざるらむ) (六一〇五八)

「三日の原」は小稿でもすでに「甕原」の表記を用いて記して来たところである。元明天皇が甕原離宮にしばしば行幸していたことが続紀にあり、その宮跡は明らかではないが、鹿背山の北山、木津川の南岸の平地、加茂町法花寺

野のあたりかと言われている。加茂町の北部、木津川の北はもと瓶原村であつた。今、加茂町に合併されてその村名を失つてしまつてゐる。福麻呂は後に廃都となつた久邇京を傷む歌も作つたが、そこではくり返し「三日の原久邇の京」と歌っている。

「布当の野」「布当の原」「布当山」「布当の宮」と歌われている「布当」の地名は今はない。「布当の宮」はもちろん久邇の宮であり、その宮は布当の原に、この布当の野が清らかで大宮所として貴いからとて定められたのであると歌っている。「三日の原布当の野辺」とあるが、布当の原は三日の原と同地であらう。

「狛山」は鹿背山と木津川をはさんで相對している、木津川の北岸の山地である。泉川に沿つて木津から蘆原に入らうとする時、北から狛山が、南から鹿背山が、門をなすごとくに迫っている。

久邇京をとりかこむ自然の美しさを福麻呂は長歌二首・短歌七首で歌い上げてくれたが、家持は久邇京時代をほとんど相聞歌で明け暮れた。それが第二群の歌々である。

その状況が一変したのが天平十五年八月十六日であつた。この日から後の歌をまとめて第四群とする。

#### 四

久邇京の歌第四群は、

卷六

一〇三七〜一〇四三

卷八

秋雜歌一五九七〜一六〇五

天平十五年八月十六日から十六年正月十一日までの歌群である。天平十六年閏正月一日に、天皇は群臣に久邇京と難波宮の優劣を問うている。すでにこの時、天皇は久邇京を捨てて難波宮に移る意志を固めていたにちがいない。天平十六年正月で久邇京時代は實質上終つたと見ていいだらう。右の第四群は、まさに久邇京終焉に至る時期の歌である。天平十三年四月三日の歌以来、久邇京時代において作歌年次の明記された歌はなかったのだから、突如として年月が、その日付までが明記された十五年八月十六日は尋常でない。そしてそれが卷六にも卷八にもある。

A 十五年癸未秋八月十六日に、内舍人大伴宿禰家持、久邇京を讃めて作る歌一首

今造る久邇の都は山川の清けき見ればうべ知らすらし(6一〇三七)

#### 高丘河内連の歌二首

故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひそ我がせし(6一〇三八)  
わが背子と二人し居れば山高み里には月は照らずともよし(6一〇三九)

#### B 大伴宿祢家持の鹿鳴の歌二首

山彦の相とよむまで妻恋に鹿鳴く山辺にひとりのみして(8一六〇二)  
このころの朝明に聞けばあしひきの山呼びとめさ男鹿鳴くも(8一六〇三)

右の二首、天平十五年癸未八月十六日に作る。

Aの家持歌は久邇京讃歌である。短歌一首だが、家持にとって初めてのテーマであり、画期的な作品である。天平十五年八月も久邇京はまだ建設中であつた。

続紀、天平十五年十二月二十四日の条に、

始めて平城の器仗を運びて、恭仁宮に収め置く。

とある。久邇京は帝都として着々と充実しつつあるかに見えたが、同十二月二十六日の続紀の記事の終りに、

初めて平城の大極殿並びに歩廊を壊ちて恭仁宮に遷し造ること、ここに四年にして、その功、纔かに畢ふ。用度の費やすところ勝て計ふべからず。是に至りて更に紫香樂宮を造る。仍ち恭仁宮の造作を停む。

とある。家持が「今造る久邇の都」の讃歌を作つた八月十六日から四ヶ月余りで、その造作がストップすることは、神ならぬ身にはわかるはずもない。それを思えばまことに空しい讃歌である。空しいと言えば、家持がこの讃歌を歌つた時、聖武は久邇京には居なかつた。前章に詳述した通り、その年七月二十六日に紫香樂宮に行幸し、九十五日間滞在して十一月二日によやく帰還した。都としての建設が行われている紫香樂宮で久邇京讃歌を作ることはいえなない。家持は留守官橘諸兄らとともに久邇京に残留していた組だったのであろう。主の居ない久邇京を、一体誰のために讃えるのか。

卷六の八月十六日の歌に続いて次の歌がある。

安積親王の、左少弁藤原八束朝臣の家に宴する日に、内舍人大伴宿祢家持の作る歌一首

ひさかたの雨は降りしけ思ふ児が屋戸に今夜は明かし行かむ（六一〇四〇）

天平十五年は雨の多い年だったようだ。秋七月五日に出雲国司から、異常な雷雨に山も崩れ家屋も倒壊し田畑も泥土に埋まったとの報告があった。八月九日には上総国司から、やはり七月に数日間大風雨が続いたことを報告している。西も東でもある。山背の山合いの盆地にも異常な雨が降り続いたのかも知れない。しかし、雨よ降れ降れ、今夜はいいらしい人の家で飲み明かし語り明かそうと、家持は歌うのである。「思ふ児」は藤原八束であり、安積親王でもあった。

安積親王は、光明皇后の生んだ基親王が夭逝した今は聖武天皇の唯一人の皇子であった。母は夫人泉大養広刀自である。天平十五年、十六歳であった。皇太子ではなかったが、皇位継承者の資格は十分であった。母が皇女でないことは、父の聖武自身、その母は藤原宮子であって、前例として成り立つ。藤原八束や家持など若い貴族たちは、この年若い皇子の周りに自然と集まっていたのである。

修辞上の表現でもあろうけれども、天平十六年二月の家持の安積皇子挽歌の中に、「わが大君 皇子の命 万代にめしたまはし 大日本 久邇の都は」（三四七五）とある。安積皇子がこの久邇京を万代までも治められるはずだったというのである。家持たちにとっては、案外それは真実の願いであったかも知れない。いや、むしろそう信じていただろうと言った方がいいかも知れない。

天平十五年八月十六日、家持が久邇京讃歌を歌った時、その席に居たのは安積皇子であったに違いない。この日に何かの宴があったのではないだろうか。巻八秋雑歌の部の鹿鳴歌二首もその席で歌われたのだろう。

第四群に属するこの後の歌は次の通りである。

大原真人今城、奈良の故郷を傷み惜しむ歌一首

秋されば春日の山の黄葉見る奈良の都の荒るらく惜しも（八一六〇四）

大伴宿祢家持の歌一首

高円の野辺の秋萩このころの曉露に咲きにけむかも（八一六〇五）

この二首は年次は記されていないが、配列から天平十五年秋の作と推定される。十六年の秋は、家持は歌わなかったと思うのである。

十六年甲申春正月五日に、諸の卿大夫の安倍虫麻呂朝臣の家に集ひて宴する歌一首 作者審らかならず

わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ(6一〇四二)

同月十一日に、活道の岡に登り、一株の松の下に集ひて飲む歌二首

一つ松幾代か経ぬる吹く風の声の清きは年深みかも(6一〇四三)

右の一首、市原王の作

たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ心は長くとそ思ふ(6一〇四三)

右の一首、大伴宿祢家持の作

天平十五年八月十六日を境に、家持の歌から青春の相聞の世界が消えて行つた。この日、八東や市原王といった仲間たちとともに安積皇子を擁して、官人としての己れの立場を明らかに言挙げしたに違いない。<sup>(注)</sup>

注 久邇京の天平十五年八月十六日について、「国文学」(学燈社)昭和五十一年四月号の拙稿「家持における詩と青春」の中で略述した。その後の家持の歌記録から明白に、家持の久邇京讃歌の対象は安積親王であると論じ、この日を境に家持の歌ははっきり世界を異にして来ると述べた。これを詳述し、論証しようとしたのだが、時間切れである。また稿を改めて論じ直さねばなるまい。